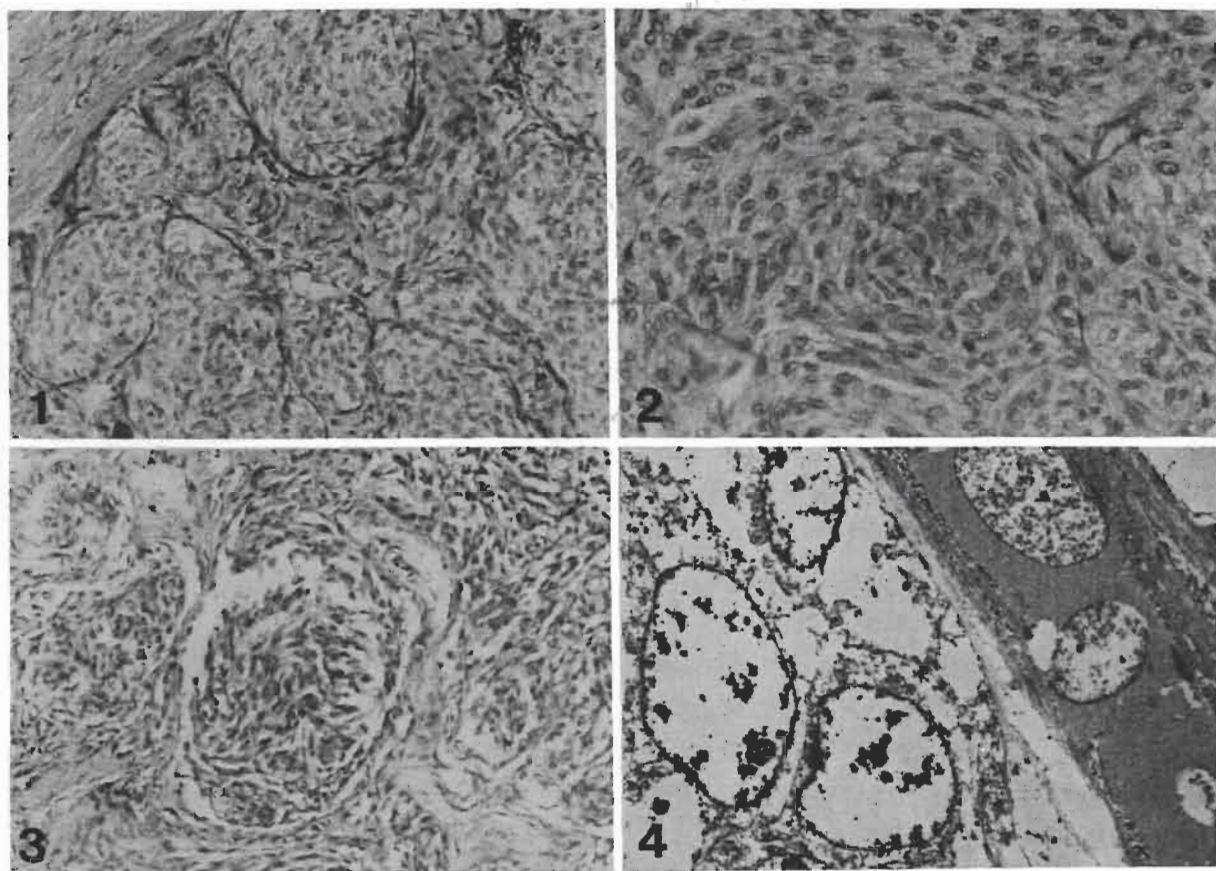


イヌの腋窩部腫瘍

日本大学農獣医学部獣医病理学教室出題 第31回獣医病理学研修会標本No.544



動物：イヌ，雑種，雌，11歳，体重15.2kg。

臨床的事項：1990年2月，左前肢の跛行がみられ，4月には左腋窩部に腫瘍が発生したとのことで神奈川県内の動物病院に来院。触診により直径約8.5cmの腫瘍が触知されたため，同病院で外科的に摘出した。後日，肺転移を起こして死亡した。

肉眼的所見：摘出された腫瘍は球形で，大人拳大，硬さは中等度，断面は充出血，壊死を伴う灰白色分葉状を呈していた。

組織学的所見：腫瘍の外側に近い部分では類円形及び紡錘形の腫瘍細胞が胞巣状を呈し，密に増殖していた（写真1，H&E染色，×120）。核は類円形で，1個の核小体を有し，クロマチン塊が散在した。胞巣内では腫瘍細胞が渦巻状（写真2，H&E染色，×240），あるいは充実性に増殖していた。鍍銀法ではよく発達した好銀線維が腫瘍細胞を大小多数の集団に分けていた。充実性に増殖した部位では，細胞境界は不明瞭となり，核分裂像がしばしば認められた。腫瘍の深部に至るにつれ，暗調な核を持つ紡錘形の腫瘍細胞が島状（写真3，H&E染色，

×120），あるいはタマネギの皮状に重なり合って増殖していた。腫瘍の中央部では出血，壊死がみられた。その他，細胞間が疎となり，粘液腫状を呈する部位もあった。

免疫組織化学的所見：アクチン，ミオシン，第Ⅷ因子関連抗原，NSE（ニューロン特異エノラーゼ），デスミン，ケラチン，S100蛋白はいずれも陰性であったが，ビメンチンに対しては紡錘形の腫瘍細胞が陽性を示した。

電子顕微鏡的所見：ホルマリン固定材料より試料を作製したため細胞内外の微細構造は明瞭ではなかったが，類円形で明るい核を持つ腫瘍細胞が小血管の外側に増殖している所見（写真3，×3,000）や，腫瘍細胞の周囲に電子密度のやや高い基板様構造がみられ，またLong spacing collagen像が認められた。

診断：研修会の席上，乳癌，malignant myoepithelioma，Schwannoma，anaplastic carcinoma，melanomaなど種々の意見が出されたが，上記の組織学的所見，免疫組織化学的所見及び電子顕微鏡的所見などから悪性血管周皮腫と考えたい。